

新型コロナウイルス感染症による長期面会制限下で療養介護病棟患者の感じていること

金岡枝里^{#1} 末吉未倅^{#1} 飛田沙知^{#1} 山崎佳子^{#1}

#1 独立行政法人 国立病院機構 徳島病院 看護部 776-8585 徳島県吉野川市鴨島町敷地 1354 番地

受付 2022.12.18 受理 2022.12.25 出版受託 2023.3.10

要旨

【目的】患者が新型コロナウイルス感染症による面会制限についてどのように考えどのようなことを感じているのか明らかにする【方法】量的研究、B 病棟入院中で同意が得られた患者 26 名。独自のアンケートと患者概要調査票を作成・調査を実施し、アンケートを単純集計、カイ二乗検定を行った。【結果】「新型コロナウイルス感染症が落ち着いてから面会するのでいい」そう思う 16 名そう思わない 2 名「看護師にもっと話を聞いて欲しい」そう思う 13 名そう思わない 2 名【考察】患者は面会者が感染する事へのリスクを考慮した結果、新型コロナウイルス感染症が落ち着いてから面会するのでいいと考えたのではないか。社会・外部から孤立した状況から看護師とのコミュニケーションを必要としていると考える。【結論】新型コロナウイルス感染症が落ち着いてから面会でもいいと 8 割の患者が思っている。その上で話を聞いて欲しいと思っているためスタッフ間で共有し関わっていく必要がある。

キーワード：神経筋難病 新型コロナウイルス 面会制限

はじめに

2020 年から流行している新型コロナウイルス感染症により、徳島県内の病院や施設でも面会制限が続いている状態である。神経筋難病の基幹病院である A 病院でも面会制限が行われている。時間制限・回数制限を設け対面面会・オンライン面会を実施していたが、現在では全面禁止となっている。B 病棟は神経筋難病を中心とした療養介護病棟であり、入院期間が 1 年を超える患者が 97% である。入院療養の場が生活の場となるため、面会制限前は患者は医療従事者と面会者との関わりが中心となっていた。その中で新型コロナウイルス感染症による面会制限が開始となり、社会・外部との関わりが減少していった。患者からも「寂しい」「会いたい」などの言葉が聞かれるが、面会制限によるストレスの有無やその対処行動については把握しきれていない。そこで、本研究を通し療養介護病棟患者が、現在の面会制限についてどう思っているのかを明らかにしたい。また、面会制限下でどのようなことを感じているのか、ストレスの有無、その対処行動を知ること、看護師に対して望んでいる役割

を明確にしたいと考えた。

用語の定義として、面会制限とは 2020 年(令和 2 年)11 月 16 日から 2021 年(令和 3 年)3 月まで施行していた対面面会とオンライン面会のこととする。

対象と方法

対象者は、B 病棟に 1 年以上入院中で言語的・非言語的コミュニケーションが図かれ本人より同意が得られた患者(26 名)。

(1) 独自の 4 段階評価のアンケートと患者概要調査票を作成・調査を実施し、結果をまとめる。

(2) アンケート調査は日中に受け持ち看護師が実施、患者概要調査票を受け持ち看護師に記入してもらい病棟内の鍵のかかるロッカーに保管する。

分析方法は、患者へのアンケートを単純集計しカイ二乗検定を行う。

倫理的配慮

対象者に研究の目的・方法について説明し研究への参加不参加は自由意思であること、プライバシーは厳守されることを文書に明

Correspondence to: 末吉 未倅. 独立行政法人 国立病院機構 徳島病院 看護部 776-8585 徳島県吉野川市鴨島町敷地 1354 番地 Phone: +81-88-324-2161 Fax: +81-88-324-8661 e-mail: kobune.misachi.yq@mil.hosp.go.jp

記した物を配布し口頭にて説明を行う。紙媒体については本研究者ら以外が目にする事はなく鍵のかかる場所で保管しその後シュレッダーで処分する。得られたデータは個人が特定できないよう暗号化しUSBで5年間保存後、復元不可能な状態にし破棄する。得られたデータは本研究以外の目的で使用しない。以上の内容を院内の倫理審査委員会で承認を得た。(承認番号 33-11)

結果

独自で作成したアンケートを集計し、アンケート結果は「そう思う」「ややそう思う」を『そう思う』、「ややそう思わない」「そう思わない」を『そう思わない』の二群に、「よくある」「時々ある」を『ある』、「あまりない」「ない」を『ない』の二群に分けた。

問 1「徳島病院の新型コロナウイルス感染症流行に伴う面会制限」について「直接面会があるのを知っている」17名、「オンライン面会があるのを知っている」19名であった。

問 2「面会制限についてどう思っているか」を図 1 に示す。「新型コロナウイルス感染症が落ち着いてから面会するのでいい」そう思う 16名、そう思わない 2名。「家族・友人の居住地が新型コロナウイルス感染症流行地域だから面会できなくても仕方がない」そう思う 15名、そう思わない 2名であった。

問 3「面会制限が開始されてから、いつも

と身体の調子が違うなと感じたことはあったか」はい 11名、いいえ 15名であった。

問 4「ストレス症状について」図 2 に示す。ストレス症状があると回答した患者はよくある 4~7名、ないと回答した患者は 13~17名であった。

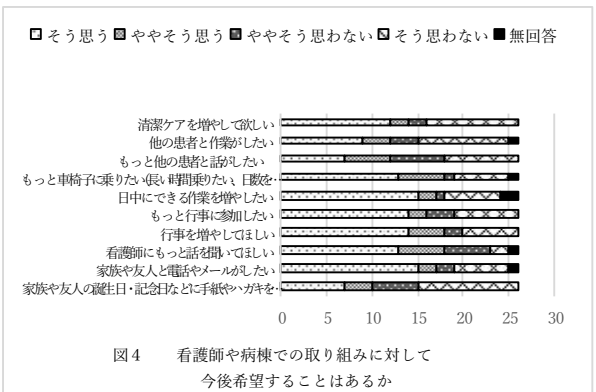
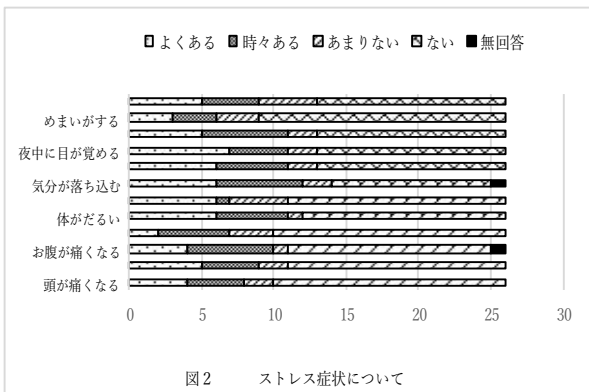
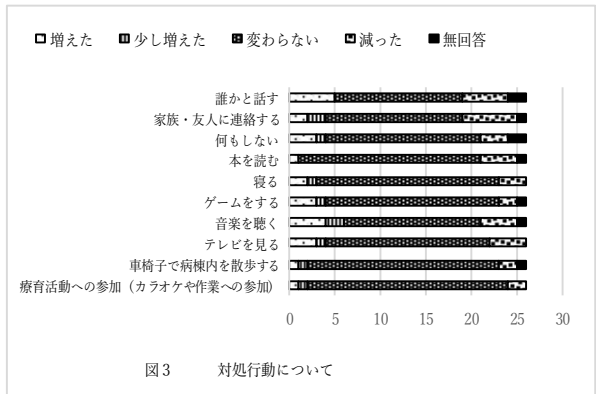
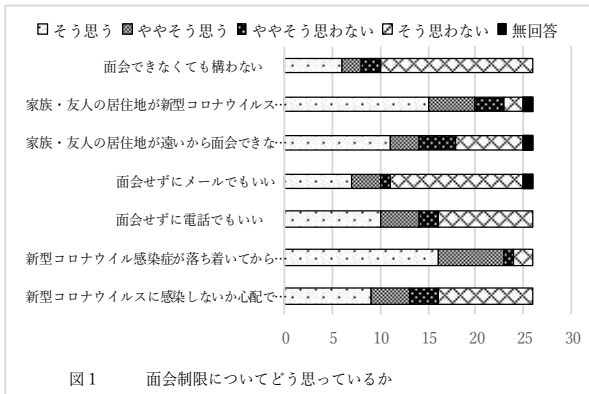
問 5「対処行動について」図 3 に示す。対処行動については 6 割以上の患者が「変わらない」と回答していた。増えた 1~5 名、変わらない 14~22 名、減った 2~6 名であった。

問 6「面会制限になってから悩みなどの相談を誰かにしたか」はい 8名、いいえ 18名。いいえと回答した理由は、悩みがない 7 名、相談したくない 2 名、相談したいができない 4 名であった。

問 7「面会制限が開始されてから、誕生日の写真を家族に送っていることについて知っているか」はい 13名、いいえ 13名であった。

問 8「誕生日の写真を送っていることを、どのように思っているか」嬉しい 14 名、ありがたい 16 名、恥ずかしい 6 名、してほしくない 12 名、関心ない 13 名であった。

問 9「看護師や病棟での取り組みに対して、今後希望することはあるかについて」図 4 に示す。「看護師にもっと話を聞いてほしい」は、そう思う 13 名、そう思わない 2 名。「行事を増やしてほしい」そう思う 14 名、そう思わない 6 名。「日中にできる作業を増やしたい」そう思う 15 名、そう思わない 6 名。「他



の患者と作業がしたい」そう思う9名、そう思わない10名であった。

集計結果と患者概要調査票を元に【性別】【入院歴】【面会頻度】【連絡頻度】【年齢】に

分類し、カイ二乗検定を行った。有意差が見られたものを以下表1～表4に示す。

表1 「行事を増やしてほしい」と性別

| | 男性 | 女性 |
|-----------------|----|----|
| 行事を増やしてほしいと思わない | 7 | 1 |
| 行事を増やしてほしいと思う | 7 | 11 |

表2 「行事を増やしてほしい」と性別のカイ二乗検定 n=26

| | 値 | 自由度 | 漸近有意確率 (両側) | 正確な有意確率 (両側) | 正確な有意確率 (片側) |
|-------------------|--------------------|-----|----------------|-----------------|-----------------|
| Pearsonのカイ二乗 | 5.266 _a | 1 | .022 | | |
| 連続修正 ^b | 3.492 | 1 | .062 | | |
| 尤度比 | 5.804 | 1 | .016 | | |
| Fisherの直接法 | | | | .036 | .028 |
| 線型と線型による連関 | 5.064 | 1 | .024 | | |
| 有効なケースの数 | 26 | | | | |

表3 「日中にできる作業を増やしたい」と性別

| | 男性 | 女性 |
|---------------------|----|----|
| 日中にできる作業を増やしたいと思わない | 7 | 0 |
| 日中にできる作業を増やしたいと思う | 6 | 11 |

表4 「日中にできる作業を増やしたい」と性別のカイ二乗検定 n=26

| | 値 | 自由度 | 漸近有意確率 (両側) | 正確な有意確率 (両側) | 正確な有意確率 (片側) |
|-------------------|--------------------|-----|----------------|-----------------|-----------------|
| Pearsonのカイ二乗 | 8.362 _a | 1 | .004 | | |
| 連続修正 ^b | 5.959 | 1 | .015 | | |
| 尤度比 | 11.03 | 1 | .001 | | |
| Fisherの直接法 | | | | .006 | .005 |
| 線型と線型による連関 | 8.014 | 1 | .005 | | |
| 有効なケースの数 | 24 | | | | |

考察

研究前は面会したいという結果が半数以上になるのではないかと考えていた。面会制限について「新型コロナウイルス感染症が落ち着いてから面会するのでいい」と回答した人は16名、「家族・友人の居住地が新型コロナウイルス感染症流行地域だから面会できなくても仕方がない」と回答した人は15名であった。厚生労働省による新型コロナウイルス感染症に係るメンタルヘルスに関する調査では不安の対象について自分や家族の感染への不安が6割以上と最も多いという結果であった。このことからB病棟の患者も家族や友人が面会に来ることで、外出するという行動にもなり、面会者が感染するのではないかと不安があったのではないかと考える。面会者が感染するリスクを考慮した結果、「新型コロナウイルス感染症が落ち着いてから面会するのでいい」と回答したのではないかと考える。

ストレス症状については、「ある」と回答する人が半数以上になるのではないかと考えていたが、「ない」と回答した人が半数以上であった。しかし、面会制限や新型コロナウイルス感染症流行は先の見通しが持たず、

これまでとは異なる生活環境となり身体的にも精神的にも何らかの影響はあるのではないかと考える。いつもと身体の調子が違うなど感じている患者は11名おり、普段の関わりの中ではストレス症状について訴えることはなかったが、今回のアンケートでの聞き取りを行ったことでいつもと身体の調子が違うと感じていることや、ストレス症状について訴えがあった。日頃ストレス症状の訴えがないとしても、スタッフは患者の気持ちを考え患者の立場に立って関わる必要があると考える。

研究前は、看護師とは日常生活で関わる人が多いため看護師と会話するよりも、家族や友人と連絡を取ったり話を聞いたりしてほしいと思っているのではないかと考えていた。しかし、「看護師や病棟での取り組みに対して今後希望することはあるか」の間に、「看護師にもっと話しを聞いてほしい」と回答した人は13名であった。齋藤は、「患者は医療従事者との接触やコミュニケーション、患者に必要な情報が提供されることを望んでいる。」¹⁾と述べている。B病棟は神経筋難病を中心とした療養介護病棟であり、最期まで病院で過ごすということ、さらに新型コロナウイルスによる長期面会制限が開始され社会・外部から孤立することとなった。患者

は看護師とのコミュニケーションが必要と感じているため、日常生活援助以外でベッドサイドでの傾聴する時間を設け、患者の思いを引き出せるように関わるのが重要であると考えている。

表1、表2の結果から「行事を増やしてほしい」と性別、表3、表4の結果から「日中にできる作業を増やしたい」と性別に有意差がみられた。男性より女性の方が行事を増やしてほしい、日中にできる作業を増やしたいと思っている。坂田は、「女性は人と、男性はモノと働くことに興味を持つ傾向が認められた。」²⁾と述べている。日頃、女性患者同士で話しをしている場面をよく見かけることがある。日中の活動や療育活動をしている女性患者もいるが、他患者とコミュニケーションを図ることや共に療育活動することを好んでいる傾向にあるため、行事を増やしてほしいと思っているのではないかと考える。他患者や看護師、他の医療従事者ともコミュニケーションが図れる機会を作り、療育指導員に情報を共有し介入していく必要があると考える。

引用文献

- 1) 齋藤道子：多剤耐性菌が原因で個室隔離されている患者の心理状態に対する看護師の認識と看護の実態，北海道医療大学看護福祉学部学会誌，14(1)，p19，2018
- 2) 坂田桐子：選好や行動の男女差はどのように生じるか・性別職域分離を説明する社会心理学の視点，日本労働研究雑誌，648，96-97，2014